



A

地域の皆さんと学校が連携して浜松ならではの学びの場を生んでいます。

地域の保存会から生きた伝統芸能を学ぶ
浜松市無形民俗文化財保護団体連絡会
清竜中学校(天竜区)
天竜区は数百年の昔から地域に伝わる踊りや祭事などの民俗芸能の宝庫です。清竜中学校では、学校教育の一環として地域の保存会の人を招き、五穀豊穡や世の平安を願う芸能「神澤のおくない」「懐山のおくない」「青谷の遠州大念仏」を後世に残し伝える活動に取り組んでいます。生徒たちは地域の大人との関わりの中で、貴重な生きた民俗芸能を学び、地域文化をつないでいます。



生徒たちは、将来、日本や世界各地の文化・伝統に触れるたびに民俗芸能継承の意味とその大切さをより実感するはず。

地域の三世代が交流する夏の2日間

地域住民・伊目小学校(北区)
奥浜名湖畔にある伊目小学校では、毎年7月、地域の三世代交流事業として「生き生き学校」を開催しています。目玉は浜名湖の遠泳大会。児童は地域・保護者の伴泳や船上からの応援に支えられ、500mまたは1kmのコースに挑みます。その他にも、朝食作り、川遊び、宿泊体験、お年寄りとの交流会が行われ、世代を越えた触れ合いの中で、生徒は地域の人に見守られていることを実感します。



ふるさとの自然や人の素晴らしさを五感で体感する地域の特色が活かされた取り組み。児童が大人になり新しい交流がまた生まれる。

地域と生徒の気持ちがひとつに

地域風揚げ会・西部中学校(中区)
西部中学校は、浜松の風揚げの歴史に古くから関わりのある地域にあります。18年前から、地元風揚げ会の協力を得て、生徒が自主的に組織する西部中風揚げ会「勢組(せいぐみ)」が中心となり、学級ごとに風作りと風揚げを行っています。活動を通し、生徒たちは地域の大人から風揚げの歴史や文化とともに礼儀を学んでいます。大人になった彼らは、その役目を引き継いでいきます。



7月から半年をかけてみんなで一緒に作った風が空に舞う。全員の気持ちが一本の糸を通じ、ひとつになった感動の瞬間。

A

ノーベル賞受賞に寄与した「光電子増倍管」講座が実現しました。



浜松ホトニクス株式会社が開発した世界最大(直径50センチ)の「光電子増倍管」という光センサーが、昨年12月にノーベル物理学賞を受賞した梶田隆章さんの研究に大きく貢献しました。市民から「小中学校などに展示することで郷土の自慢になり、将来の目標にもなるのでは」という声が寄せられたことを受け、浜松ホトニクスによる特別講座が実現。昨年12月から1月にかけて蛸塚中学校、丸塚中学校、鴨江小学校、元城小学校・北小学校(合同)で順次開催され、浜松ホトニクスの「光電子増倍管」を前に、子供たちは光の最先端技術やノーベル賞との関わりについて学びました。「宇宙線」や「ニュートリノ」など少し難しい内容もありましたが、大きな事故による研究中断の危機があってもあきらめずに乗り越えたことなど、梶田さんの恩師である戸塚先生(故人)のエピソードも交えた興味深い講座に、子供たちは真剣に聞き入っていました。講師への質問コーナーでは、子供たちが積極的に手を挙げ、思い思いに質問。最後に講師から「今日の話に家に帰って説明してください。そうすれば今日のことが記憶に残るはずですよ」と宿題が出されました。また、現在のニュートリノの研究が2025年には次代の研究に移っていくことから「ここに集まった皆さんの誰かが、この研究やそれを支えるものづくりに関わっているかもしれませんね」と子供たちに夢と未来を託しました。



第1回の講座は、一昨年ノーベル物理学賞を受賞した天野浩名古屋大学特別教授の母校、蛸塚中学校で行われた。



光電子増倍管の実物を前に、熱心に質問する生徒たち。

Q4 市民や地元企業はどのように「人づくり」に参画していただけますか？

